View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hosei University Repository

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

占領下(1945-1952)日本のクリスマス

著者	金 命柱
出版者	法政大学大学院　国際日本学インスティテュート専攻委員会
雑誌名	国際日本学論叢
巻	9
ページ	42-23
発行年	2012-03-23
URL	http://hdl.handle.net/10114/7527

Hosei University Repository

相良匡俊先生退官記念論文

占領下（1945－1952）日本のクリスマス

社会学専攻修士課程２年
金　　命　柱

はじめに

日本にはキリスト教徒の数が少なく、日本人の日常生活はキリスト教とほぼ無関係である。そうした日本の社会で、クリスマスが定着したのは第二次世界大戦後であると考えられる。７年間にわたり、アメリカを中心にした連合国に占領・支配されるなかで、日本はアメリカの文化やキリスト教の影響を受けることになった。敗戦後の日本人は占領軍の下でどのようにクリスマスを祝ったのだろうか。

本論では、敗戦からサンフランシスコ講和条約の締結・発効までの占領時代（1945－1952）の日本社会とクリスマスの関係について、朝日新聞の報道記事を基本的な情報源としている。その上で当時、アメリカ側が撮影したクリスマス風景の写真を参照し、また若干の補足的情報を分析する。

１節　アメリカ主導のクリスマス

（１）連合国軍最高司令官「マッカーサー」

ジョン・ダワーは『敗北を抱きしめて（上）』（三浦陽一、高杉忠明訳、

Hosei University Repository

岩波書店、2001）の「第7章　革命を抱きしめる」のなかで、市民からマッカーサーに宛てられた様々な手紙の内容を紹介している。

> たとえば、マッカーサーとイエス・キリストとサンタ・クロースと天狗が同じものだと思いこみ、そのイメージを絵に描いてマッカーサー元帥に贈りつけてきた芸術家。他にも、明らかにおべっかを使っているものや奇矯な手紙を送りつけてくる者もいた。こうしてあらゆることが語られ、行われたのだが、奔流のようなこれらの手紙は、かつて一度も経験したことのない敗北の「空間」に身をおくことになった日本人が、この空間を新しい自己表現で満たそうと活発に行動したことを示すものであった。

マッカーサーに手紙を「贈りつけてきた芸術家」の固有名詞は明示されていない。重要なのは、その「芸術家」が、一般的には、およそ結びつくはずのない「マッカーサーとイエス・キリストとサンタクロースと天狗」を図像化したことである。しかし、よく考えてみれば、連合国軍最高司令官「マッカーサー元帥」は敗戦国日本の民主化に努力し、それを実現させるうえでの最高責任者であり、また、日本の軍国主義をある意味で根絶し、人々にアメリカの考える自由と平和をもたらし、日本を再生させるための役割を担う責任者でもあったのだから、その役割は「イエス」が「キリスト」として再生・復活し、人類を救おうとしたことにも相通じている。

また、「マッカーサー元帥」が自由と平和を日本に贈り届ける役割を果たす人物であるという表象も、「サンタ・クロース[1]」がクリスマスに、子どもたちになんらかの贈り物をもたらす老人として想定されていたことを考えれば、両者のイメージが重なり合ったとしてもおかしいものではなかった。さらにいえば、ダグラス・マッカーサーは、「性格は孤高を好み敬虔なクリスチャン（英国国教会）で保守的反共思想をもち（中略）自己

四一

Hosei University Repository

顕示欲の強い人間[2]」であり、「『日本を自由・寛容・正義』を基調とする民主的・平和的国家に再生するというメシア的使命を抱いていた[3]」人物であり、占領地日本の精神的空白をキリスト教の教義で埋めることを考えた人物であったらしい。

「天狗」のイメージについては、小松和彦の天狗についての解説[4]が説得的である。小松の解説を以下に引用する。小松によれば、日本における「天狗」は、「背に羽があり、鼻の高い、手には錫杖や団扇をもった山伏姿」をしている「神秘的な空想上の動物（異人）の一つで、並みいるそれらの動物の中でも、鬼や河童と並んで、その代表格の位置を占めている」。また「天狗は、背に羽をもっていると考えられていたことからもわかるように、空中飛行を得意として」、「またその衣装は修験者・山伏から借用している」とも述べている。

要するに、「芸術家」が「マッカーサー」を「イエス・キリスト」と「サンタ・クロース」になぞらえられたのは先に述べた通りであるが、加えて、「天狗」にたとえたのには、それなりの理由があったといわねばならない。つまり、「マッカーサー」は外国人として、「天狗」の風貌に似た白人特有の赤ら顔と高い鼻を有しており、彼は連合国軍最高司令官として、降伏文書の調印に先立ち、1945年８月30日に羽根がある専用機バターン号で神奈川県の厚木海軍飛行場に到着したのであり、まさにその行動は「天狗」の飛翔にも似ていたのである。

このように考えれば、先の「芸術家」が自分自身の印象を図示した「新しい自己表現」は、必ずしも間違ってはいなかったというべきであろう。

問題は、米軍の占領統治時代にあって、日本人のすべてではないにしても「芸術」に関わる先の人物には「イエス・キリストとサンタ・クロース」、つまりクリスマスがその念頭にあったということであると思われる。それを「芸術家」の創造性といいかえることもできるであろう。

Hosei University Repository

（2）連合国軍総司令部（GHQ）によるクリスマス

「マッカーサー」とクリスマスとの関係といえば、連合国軍総司令部（GHQ）が使用した第一生命ビル（東京都千代田区有楽町）の建物の玄関にクリスマスの飾りつけ[5]が行われていたことに注目しなければならない。1945（昭和20）年12月21日に至って、ようやくクリスマス報道が復活するが、それは「進駐軍のクリスマス」（『朝日新聞』）にほかならなかった。21日の紙面には次のように書かれている。

> 進駐軍の宿舎では今クリスマスの飾りつけにいそがしい、埼玉から運ばれたヒマラヤ杉をクリスマスツリーに、京都からとりよせた金紙、銀紙でベルや星、それに提灯や風船もさげられている、マツ（ママ）クアーサー司令部入口の大円柱はこれに無数の電球もとりつけた、クリスマス・イブには故国からとりよせた七面鳥が数々のクリスマス、デイナーに君臨する。

引用した新聞記事から、アメリカが統治した日本での、とりわけ東京の総司令部で開催されるクリスマスの様子を見て取ることができるが、そのツリーとその飾りは「埼玉」や「京都」などから調達したものであって、占領軍の政治権力が表象されたものであった。しかも、その司令部の建物にクリスマスの飾りつけをすることで、おそらくそれは街路を通る人々の視線にさらされ、クリスマスを視覚化することにもなっていたであろうことが容易に想像できる。さらに当日の『朝日新聞』にはその写真が掲載され、その『朝日新聞』を入手した人々は、直接その飾りつけを見ることができなかったとしても、新聞報道を通じてクリスマスを共有することができたといってよいであろう。さらにマッカーサーは『朝日新聞』（1946年12月25日付け）の記事に「クリスマス・メッセージ」を寄せている。記事

Hosei University Repository

は「キリスト生誕のよき日にあたり、われら挙ってわが陸軍の高い理想を保持してキリストの生誕が人類の心の中に点火した希望を地上に実現する一助」となすという内容のものである。このメッセージはマッカーサーの宗教心がきわめて高邁であったことを明示しているといえよう。

ところで実際の連合国軍総司令部（GHQ）によるクリスマスのイルミネーションの風景については、マーク・ゲインの『ニッポン日記』（井本威夫訳、1998）が記している。マーク・ゲインは、『シカゴ・サン』の東京支局長として、1945年12月に米軍厚木基地に降り立ってから約２年間、ジャーナリストとして首都東京を中心に、山形県酒田、長野県湯田中、京都、大阪などを回り、占領下の日本の目撃報告を書いた人物である。彼の取材内容をまとめたものが『ニッポン日記』である。マーク・ゲインはこの日記の12月21日の項で次のように書き記している。

> 夜、総司令部の前を車で通り過ぎたが、べらぼうな数の豆電球でえがき出された「メリー・クリスマス」の看板があかあかと光を投げていた。その光は皇居の石垣を照らし、ひろいお濠の水はさざ波を立てながらこれをうつし返していた。私は、日本のいちばん暗い制度の上に投げかけられているアメリカの電光の中に、何かの象徴が内在するのを感ぜざるをえなかった。またその光は、かつては金融日本の心臓部をなしていた敷地の上に、まるで何かの記念塔のようにうず高く積みあげられている崩れた建物の堆積の上を照らし、ひっきりなしに通るアメリカ軍のジープやトラックを照らし、それからまた、日比谷公園の入り口でGIたちを誘惑する女たちをも照らしていた。

三八

天皇の住居である皇居を囲む濠や石垣に「豆電球でえがき出された『メリー・クリスマス』の看板があかあかと光を投げている」光景に、マーク・ゲインは「何かの象徴」を感じ取っている。皇居を見下ろす形で外堀

Hosei University Repository

沿いに建てられた第一生命という企業の建物に連合国軍総司令部（GHQ）の本部を置くことを選択したことの意味は大きい。つまり、その場所に連合国軍総司令部（GHQ）を置いたことは、日本の金融経済を完全に支配したことを暗示しているし、さらに、連合国軍が天皇のさらにその上に君臨していることを伝えるという強い政治的意図を感じることができるからである。マーク・ゲインは、連合国軍総司令部（GHQ）が接収した第一生命ビルが、かつての「金融日本の心臓部」であったことを知り抜いている。また、その一方で、その建物に近い「日比公園の入り口」でたむろする「女たち」、つまり街娼をクリスマスのイルミネーションが照らしているさまをも見ていた。さらに、マーク・ゲインは続けて次のようにも書き留めている。

> 東京でもクリスマスのお祝いだ。銀座の一ダンスホールはこんな看板を出している。「メリー・クリスマス！　美人を揃えて近日開店します。」

一般庶民は敗戦後も、なお生き続けなければならなかった。おそらく、クリスマスに便乗するかたちで、銀座の「ダンスホール」が開店し、GI（米国陸軍兵士）たちの一部はそこに通ったのだろう。明治以来のキリスト教の宗教的理念とはまったく質の異なるクリスマスであった。日本近代のクリスマスの歴史は、「ダンスホール」でアメリカ軍の男性と日本の女性がダンスを興じる光景にまでおよぶ長い歴史があるのである。

本節の冒頭でジョン・ダワー『敗北を抱きしめて（上）』におけるクリスマス関係の記述に言及したが、同じく、『敗北を抱きしめて（下）』の「第16章　負けたとき、死者になんと言えばいいのか？」でもクリスマスについての記述を認めることができる。その353ページには「1949年12月26日、マッカーサー元帥によるクリスマス特赦で釈放される戦犯を、雪の

三七

Hosei University Repository

なか、巣鴨拘置所を囲む有刺鉄線の外で待つ家族や縁者たち」というキャプションをともなって1枚の白黒写真が掲載されている。その写真には、大人の身長よりもはるかに高く張り巡らされた有刺鉄線越しに、拘置所の建物を注視しながら、雪の降るなかでたたずんでいる7名の家族や親族の姿が映っている。また、遠くには監視塔が見えている。

1945（昭和20）年8月15日以降も戦前からの治安維持法によって監獄に閉じ込められていた人々は「占領軍の一九四五（昭和二〇）年一〇月四日の指令によって釈放され[6]」た。実際に、政治犯が釈放されたのは同月10日のことであった。このような措置とは別に、戦犯として指名された人々の何名かがクリスマスに巣鴨拘置所から解放されたことは、アメリカによる日本の占領統治の背景にキリスト教的価値観が反映されていた一例として認めることができるであろう。

その一方で、1945年から5年後のことになるが、「Xマスまでに復員」という見出しの記事を『朝日新聞』（1950年11月25日付け）が掲載している。記事の内容はマッカーサーが「私はクリスマスまでに家に帰らせるとの兵隊に対する約束を守りたい。私は出来るだけ早く作業を完了させたいと思っている」と語ったというものである。この「作業」の「完了」とは、おそらく日本占領に関する業務一般の完了を指し示していたのではないだろうか。このように当時のマッカーサーの指示、対応、思惑を考えれば、先に引用したように、ダグラス・マッカーサーが「敬虔なクリスチャン（英国国教会）」であったことの証左であるといえるかもしれないのである。もっとも、竹前栄治はマッカーサーの立場は次のようなものであったと述べている。

三六

マッカーサーは、日本をキリスト教化しなければ、敗戦の混乱によってもたらされる共産主義化を防止することはできないとして、たまたま一九四五年秋来日した牧師たちに、一〇〇〇人の宣教師の派遣を

Hosei University Repository

依頼したり、また折りにふれて日本がキリスト教国になる希望を表明し、そのためにはいかなる援助も惜しまないと力説した[7]。

本論はアメリカの日本占領政策を検討することが目的ではないので、当時のマッカーサーの立場に関してはこれ以上の言及は避けるが、1947（昭和22）年12月24日の『朝日新聞』は、マッカーサーがクリスマスに極東軍将兵に対して「健康と幸福」を祈ってメッセージを送ったことを報道している。そして、同じ紙面に「進駐軍のXマス行進」をキャプションとして、進駐軍が有楽町付近を行進する風景を撮影した写真が掲載されていることを指摘しておきたい。それに関する記事には「アメリカ特別奉仕部隊主催のクリスマス祝賀行進は二三日午後宮城前広場から丸の内を練り、サンタクローズ（ママ）をのせた三十六台のダシが大人気だった」とある。アメリカ占領軍は文字通り占領政策の一環としてクリスマスのイベントも積極的に行っていたのである。

1951年12月７日付けの『朝日新聞』には「風船つきやXマス型　米将校夫人ご自慢の生花展」という見出しで、「港区三田」の「総司令部将校クラブ」で生花コンクールが開催されたことを報じている。その報道を読むと、「盛花、投入れ、自由花とりどりに百余点が出品され（中略）クリスマスツリー風に飾ったのや、風船をあしらったのなど変わったスタイルもあり、リッジウェイ大将夫人も出品した」とのことである。リッジウェイ大将（1895－1993）とはマッカーサーの後任として1951年４月から1952年４月まで連合国軍総司令部の第２代最高司令官として日本の統治にあたったマシュー・バンガー・リッジウェイのことである。このコンクールの審査員は勅使河原蒼風を含む3名の日本人であった。日本の生け花をクリスマス風にアレンジするといった催しにも日米の文化が融合する戦後のかたちを見て取ることができよう。

日本における占領軍関係のアメリカ人の個人宅でのクリスマスもそれぞ

Hosei University Repository

れ行われていたであろうが、およそ、日本を占領統治したアメリカサイドのクリスマスは以上のようなものとして把握することができるであろう。

では、占領された日本サイドのクリスマスはどのようなものであったのだろうか。それについては次節で検討する。

第2節　占領下における日本人のクリスマス

（1）占領軍が撮影した日本のクリスマス風景

占領統治時代、アメリカ人、とりわけ占領軍関係者が日本でどのようなクリスマスを過ごしていたかについては前節で検討した。それではこの時期、日本の人々はクリスマスをどのように過ごしたのであろうか。

1946（昭和21）年12月24日に東京の帝国ホテルで開催されたクリスマスミサに参加した人々を撮影した1枚のモノクローム写真がある[8]。この写真に付されたキャプションを以下に引用する。

> 東京帝国ホテルで催された、連合軍軍人と日本人の合同クリスマスミサ。軍人の家族も多数参加しているようだ。日本人はその服装から察すると、看護婦として占領軍に雇用された人々であろうか（12月24日）。

このキャプションがすべてを物語っているといってもよいが、写真の前列には少なくとも5人の看護婦がその業務の象徴である白い看護帽を被っている姿を認めることができる。中には口を大きく開けて、讃美歌を歌っている看護婦も見受けられる。他に約40名を越える人々がいるが、その中にも看護帽姿の日本女性たちがいる。男性たちはおそらく連合軍の軍人であろう。同じ日に東京会館でもクリスマスのイベントが開催されていた。こちらはクリスマスパーティーの様子を撮影した1枚のモノクローム写真

Hosei University Repository

である[9]。写真中央にはサンタ・クロース姿の男性がにこやかにたたずんでいる。参加者の男女は全員が盛装しており、軍服姿の男性もいる。讃美歌の歌詞が書かれていると思われる紙をそれぞれ手に持って、歌に興じている。キャプションには次のように書かれている。

> GHQ天然資源局のメンバーが、東京会館でクリスマスパーティーを開いた。サンタクロースをかこんでクリスマスキャロルを歌っている。天然資源局（NRS）は、農地改革の推進に重要な役割を演じた（12月24日）。

東京千代田区で現在もなお営業を続けている帝国ホテルは日本を代表する名門ホテルであり、東京会館はフランス料理を提供する結婚式場、宴会場として、1920年から営業している、これまた有名な施設である。1946年の12月24日のクリスマス・イヴに、前者ではアメリカ人中心のクリスマスパーティーが、後者では日本人やアメリカ人が参加するクリスマスミサが行われていたのである。戦後のクリスマスの過ごし方としては、看護婦としての日本人女性たちが参加したミサは特殊な例といえるかもしれない。しかし、クリスマス本来の過ごし方という観点からすれば、帝国ホテルと東京会館におけるイベントは、ある意味で当然の集まりであったといえよう。

ところで、クリスマスは何も大人たちだけのイベントではない。むしろ、クリスマスの主役は子どもたちであるといっても過言ではない。そこで、次に占領軍の統治下において、日本の子どもたちのクリスマスにアメリカが深く関与していた事実も確認しておきたい。たとえば、『開封された秘蔵写真GHQの見たニッポン』（太平洋戦争研究会編著、世界文化社、2007）という占領下の日本をアメリカ側が記録した写真集が刊行されている。アメリカ陸軍専属の写真班が当時の日本の公式行事や事件、事故などを、あ

Hosei University Repository

らゆる分野にわたって撮影し、記録した資料といえるものである。

もちろん、占領軍主体の撮影である以上、撮影にはなんらかの意図が介在しているに違いない。そのようなバイアスがかかっていることを考慮するとしても、それぞれの写真は占領下の日本の姿をそれなりに写し出しているといえるであろう。たとえば、この写真集の140ページには「希望にあふれる子どもたち」(Children in Hope to the Future) というタイトルがつけられている。次の141ページには「東京・銀座の店先で、クリスマスのおもちゃを選ぶ子ども (1947年12月16日)」というキャプションが記されている。撮影された子どもの写真から想像するに、おそらくフェルト生地の帽子を被っているのであろう。また、その子どもはチェック柄の暖かそうなコートを着用し、質の良さそうなズボンを履いている。さらに、驚くべきことに、革靴を履いて、手袋もしている。その男の子はおもちゃが並んだ木製の台の方をじっと見ている。

「東京・銀座の店先」とはいえ、店とは名ばかりで、それは日本の祭りの際の縁日で見かける露天商の小屋そのものである。それはともかく、1947年、すなわち、敗戦からわずか2年後に、このような子どもが数多くいたとは思えない。明らかに、アメリカサイドの演出に違いない。というのも、『米国国立公文書館所蔵写真集　敗戦国ニッポンの記録昭和20年～27年　上巻』(アーカイブス出版株式会社、2007) という別の記録写真集の「第4章　進駐軍が出会った戦後ニッポン」の121ページにはクリスマスを過ごす子どもたちの3枚の写真が掲載されており、先に述べたおもちゃを見つめる子どもとはまったく別のクリスマスの子どもたちの様子を確認することができるからである。

ここで、3枚の写真についてそれに付されたキャプションも紹介しておきたい。まず、ページ上段には「初めてのクリスマスパーティー」と記されたキャプションを認めることができ、そこには「日本人の子どもたちを戦艦ディキシーの兵隊たちがご招待。初めてのアメリカ式クリスマスパー

Hosei University Repository

ティーに期待を膨らませながらはしけに乗る。（昭和25年１月場所不明ヤング撮影）」と記されている。写真には約30名の子ども（男女）が埠頭に並んでこれから戦艦に乗り込もうとしている様子が写っている。しかし、その服装は銀座でおもちゃを見つめる子どもの写真とは明らかに異なり、見栄えのしない普段着を着ており、手袋や帽子など一切身につけてなどいないし、革靴などだれ一人として履いてはいない。

同じページの中段に掲載されている２枚目の写真は、戦艦ディキシーの艦内でのクリスマス風景を撮ったものである。「初めてのクリスマス・プレゼント」と題されたキャプションの内容は、「アメリカ戦艦ディキシーの艦内に招かれた子どもたちは、さまざまなクリスマス・プレゼントをもらった。（昭和25年１月場所不明ヤング撮影）」というものである。写真には、頭を刈り上げた男の子が艦内で軍関係者と思われる男性からプレゼントの大きな紙の包みを手渡してもらっている風景が写っている。その男性の隣りにはサンタ・クロース姿の男性もいる。

最後の３枚目の写真は同じページの下段に掲載されている。「食堂でのクリスマスパーティー」と題されたキャプションの内容は「戦艦ディキシーの食堂でひと月遅れのクリスマスのパーティーをする子どもたちと海兵隊員たち。子どもたちはナイフとフォークの正しい使い方も教えてもらった。（昭和25年１月場所不明ヤング撮影）」というものである。セーラー服姿の2人の女の子と丸刈りの男の子たちがスチール製のテーブルの台を前にして、それぞれ隣りに坐った海兵隊員たちと食事をしている情景を撮影した写真である。

これら３枚の写真は「ヤング」という名前のアメリカ人が同じ日に撮影したもので、一連の流れのある写真になっている。つまり、これら３枚の写真は「戦艦ディキシーの兵隊たち」が子どもたちをクリスマスに招待したのだから、アメリカの演出であることは明らかであろう。

アメリカによるクリスマスの演出は『米国国立公文書館所蔵写真集　敗

Hosei University Repository

戦国ニッポンの記録昭和20年～27年　下巻』（アーカイブス出版株式会社、2007）という記録写真集の83ページに掲載された写真にもはっきりと現れている。その写真には日本の家族（祖母、母、３人の子ども）がNGOから配送されたクリスマス・プレゼントのダンボール箱を開けて、その中から衣類などを取り出す光景が写っている。家族全員の視線は箱の中に注がれている。キャプションは次の通りである。「ちょっと早めのクリスマス・プレゼント」というタイトルのもとに、「箱にCAREと書かれている。CAREは国際協力NGOで、もともとは戦後ヨーロッパを支援するためにうまれた組織。昭和23年５月から日本にも援助の手を差し伸べるようになった。（昭和25年12月12日横須賀撮影者不明）」と記されている。

おそらく、銀座でおもちゃを見つめる子どもやアメリカの戦艦に招待された子どもたち、あるいはアメリカの配慮によってNGOによって自宅にクリスマス・プレゼントを送られた子どもたちの写真には、アメリカの政治的意図が介在しているといってよいだろう。敗戦後まもないクリスマスを過ごした子どもたちの現実を想像すると、まったくプレゼントなどもらうことがなかった子どもたちも数多く存在したことであろう。むしろ、そのような子どもたちの方が圧倒的に多く存在していたのではなかったか。なにより、戦争によって孤児となった子どもたちもいたのである。たとえば、『米国国立公文書館所蔵写真集　敗戦国ニッポンの記録昭和20年～27年　下巻』（アーカイブス出版株式会社、2007）の82ページには先ほど言及した家族とはまったく別に、孤児たちが救援物資の食事を取っている写真も掲載されている。彼らはいわゆる戦災孤児たちにほかならない。「救援物資の食事を楽しむ孤児たち」というキャプションには、「東京・中野にあった孤児院にて、食事中の4人の少年。あどけなく幸福そうな顔つきである。食糧事情が最悪な時代、戦災孤児だった彼らはこうした恩恵を受けなければ生存できなかった。（昭和21年12月17日東京ホウィーラー撮影）」とある。彼ら子どもたちの服装は改めて述べるまでもないだろう。なかに

三〇

Hosei University Repository

は草履を履いている男の子もいる。

占領軍が撮影した日本のクリスマス風景には上述の如く、アメリカ側の演出の気配がきわめて濃厚である。クリスマスは政治的に利用され、どこか画一的な光景が生み出された。だが、敗戦後の一般大衆のクリスマスの過ごし方はどうだったのであろうか。これについて検討することにしよう。

（2）朝日新聞の伝えるクリスマス

1946（昭和21）年12月13日付けの『朝日新聞』は、「クリスマスの贈物引揚のこどもたちに」、さらに同じ月の25日付の同紙は「Xマス・イーヴ孤児の喜び」をそれぞれ見出しとして、東京都やカナダの修道院本部から戦争による犠牲者、つまり孤児になった子どもたちにクリスマスのプレゼントとして、洋服、スカート、毛布、デコレーションケーキなどが贈与されたことを報道している。

1949（昭和24）年になると「盛り場にどっと家族連れ」（12月5日）、「カドマツのはしり　ばかでかいXマス・ツリー」、「Xマス・イヴ深夜の人出」といった見出しの記事が目を引くようになる。上野や銀座などの盛り場に繰り出した大勢の人々の様子が報じられるようになるのである。その結果、翌1950年のことではあるが、昭和25年12月25日の『朝日新聞』に、「イヴに火事新記録　銀座をはじめ二十六件」という記事が掲載され、さらに、1951（昭和26）年12月25日の『朝日新聞』は前日のクリスマス・イヴの銀座の光景を、「Xマス・イヴの二十四日、東京の銀座の盛り場は深夜まで人波がこったがえし自動車も走れぬ程、午後十二時までの交通事故が都内では三十九件（うち死亡三名）に達した。クリスマス・プレゼント全盛時代とあってデパート、商店街では飛ぶような売れ行き」と報じている。

1952（昭和27）年になると、12月25日付けの『朝日新聞』には「70件、47名が死傷　戦後最高Xマス・イヴの交通事故」という見出しを見ることができる。24日から25日にかけて、東京の交通事故が「戦後最高」であっ

Hosei University Repository

たという不幸な内容である。さらに、同紙の別の紙面には「千鳥足のクリスマス族　お巡りさんもオールナイト」と伝える文言を認めることができる。そこにはクリスマス・イヴに銀座四丁目に繰り出した多くの人々が歩く隙間がないほどまでに密集している写真が掲載されている。いずれにしても、当時の人々が、どれほどクリスマスに浮かれていたかを推測することのできる記事の内容であり、写真である。しかし、これも戦後日本のクリスマス風景であったのだろう。

1951（昭和26）年12月22日の『朝日新聞』には、依然として孤児たちにクリスマス・プレゼントを渡す記事が見受けられる。その記事には「戦争で両親を失った気の毒な孤児たちにクリスマスの喜びをわかつため、二十一日午後一時から朝日新聞厚生事業団が『養護児童巡回クリスマスの会』を開きました」と書かれており、東京杉並区の養護児童施設にサンタ・クロースの格好をした男性が子どもたちに「ニュース・カーにおもちゃ、学用品、お菓子など」を贈与する光景の写真が掲載されている。

このように、占領統治下の日本では、人々はそれなりのクリスマスを楽しむ一方で、クリスマスが華やかな祝祭であっただけに、戦争孤児の存在という暗い話題が逆説的に脚光を浴び、幸福そうに街に繰り出す人々と著しい対照を示していたのだった。街では火事や交通事故が多発し、デパートや商店がクリスマスに便乗するかたちで商売繁盛を競ったのである。

（3）家庭におけるクリスマス

視点を家庭の中に移そう。日本のテレビ放送が始まったのは、1953（昭和28）年２月１日にNHKが行ったものであった。昭和20年代、家庭内の娯楽のメインはラジオ放送を聴くことにあった。そのラジオがクリスマス関係の番組を集中的に放送していたことを指摘しておく必要がある。たとえば、1952（昭和27）年12月25日付けの『朝日新聞』のラジオ欄を見れば、日本文化放送は、午前中に「文化評論クリスマスの意義」、「幼稚園赤ずき

Hosei University Repository

んちゃんのクリスマス」、「各国クリスマス料理」、午後になると「クリスマス・スケッチ」、さらに夜には「漫談学校クリスマス大饗宴」、「クリスマス音楽」を放送している。NHK第一は、日本文化放送のクリスマス番組の数を越える多数のクリスマス関連番組を編成し、放送している。午前から午後、そして夜の番組名をあげると、午前中には「イギリス『カンタベリーのクリスマス』」「クリスマス・カロル」、「音楽の手帳『クリスマスにちなんで』」があり、午後になると「Xマスページェント『神我と共にあり』」、「合唱『ヘンデルの救世主』」が午後5時までに放送され、午後6時からは、「世界で一人のサンタクロース」、「Xマス歌謡曲大会」、「社会の窓『クリスマス・ツリーの影に』」、「フィリピンとアメリカのクリスマス」などの番組が午後11時まで放送されており、ほぼ1日中、クリスマス関係の放送が行われたことになる。ドキュメンタリー番組も放送されてはいるが、なによりも歌番組が多かったのが特徴だといえよう。まさに25日の各局のラジオ放送はクリスマス一色といってもよいくらいであった。ということは、ラジオを購入していた家庭では、25日はほぼ1日中、クリスマス番組を聴くことになったのである。現在も、クリスマス当日はそれに関連するラジオ番組を制作し、放送するのであろうが、テレビの各家庭への完全普及もあって、1950年代のラジオのクリスマス番組の多彩さに比較すれば、現在は、ラジオが当時ほどの数多くのクリスマス特集番組を放送することはないであろう。ということは、娯楽が少ない当時の人々にとって、耳から入るクリスマスの音楽がどれほど楽しい娯楽であったかを示している。ラジオ放送のクリスマス特集番組の聴き手の大半はキリスト教徒ではなかったはずである。だが、キリスト教徒でない人々にとってもクリスマスの番組は楽しみなものであったのだろう。

二七　1940年代から1950年代にかけて、クリスマス関連商品は、現在ほど十分に生産されておらず、したがってまた、世間に流通してもいなかった。そのことを説明するかのように、1952（昭和27）年の『朝日新聞』は、連日

Hosei University Repository

のように、家庭でできるクリスマス関連グッズの作り方を掲載している。たとえば、「サンタさんのお菓子入れ」では、空き缶を再利用した菓子入れやハンカチ容れの作り方を説明している（12月６日）。「すすきでミミズク」は枯れススキの穂を利用してクリスマス・ツリーを作ろうという記事であり（12月16日）、「紙粘土でロウソク立て」は古新聞、古雑誌、廃物のカンなどを利用してロウソク立てを作ることができるというものである（12月18日）。12月22日の『朝日新聞』には、子どもたちのパーティーのためのクリスマス菓子の作り方が話題になっている。要するに、これらの記事は手製で、経費もほとんどかからず、手軽にできるクリスマス用グッズやケーキの作り方を紹介しているのである。実際にどれほどの人々がこれらの新聞記事を読み、それを実行したのかは分らないが、非常に時代を感じさせる記事といってよいだろう。クリスマスの楽しみ方、過ごし方は人それぞれであるにしても、これらの記事から家庭内にクリスマスを導入しようとした動きを確認することができる。どういう力が日本のマスメディアのクリスマス熱をあおったのだろうか。

占領下の日本で、子どもたちや大人が街や家庭でどのようなクリスマスを過ごしたかについて、その概要を把握したところで、日本が主権を回復し、次第に経済的に豊かになってゆく時代に、子どもたちや大人がクリスマスをどのように過ごし、楽しんだのか、それまでの時代とどのような点で異なるのかを検討する必要があるが、これに関する考察は別の機会にゆずる。

結　論

７年間の占領統治時代、占領する側であるアメリカと占領される側である日本人のクリスマスを比較・検討したところ、クリスマスがある程度の政治性をもって祝われた。また、日本の人々はキリスト教の宗教行事と

Hosei University Repository

してのクリスマスではなく、ひとつのイベントとして、街や家庭の中でクリスマスを祝おうとする動きを示した。

付記。本論執筆後に、勝又浩『「鐘の鳴る丘」世代とアメリカ－廃墟・占領・戦後文学』（白水社、2012年１月）が出版された。この著作の10ページから11ページにかけて、占領下のクリスマスに関する言及がある。氏は、占領下日本におけるキリスト教文化について、「キリスト教抜きのキリスト教文化の取り込みに過ぎなかった。これは、言うならば明治以来繰り返してきた、日本人の特技でもある」としている。

引用・参考文献

岩崎　稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一〔編著〕2009『戦後日本スタディーズ１「40・50」年代』紀伊国屋書店
勝又　浩　2012『「鐘の鳴る丘」世代とアメリカ－廃墟・占領・戦後文学』白水社
葛野浩昭　1998『サンタクロースの大旅行』岩波新書
太平洋戦争研究会　2006『図説アメリカ軍が撮影した占領下の日本』河出書房新社
知切光歳　2004『天狗の研究』原書房
竹前栄治　1983『GHQ』岩波新書
暉峻淑子　2003『サンタクロースを探し求めて　グーテンベルクの森』岩波書店
中村政則、天川　晃、尹　健次、五十嵐武士編　1995「占領と改革」『戦後日本・占領と戦後改革　第２巻』岩波書店

註

（１）サンタ・クロースの起源とその役割について、『朝日新聞』（1952年12月22日）の「サンタおじさんは実在者」という記事には次のように書かれている。「サンタ・クロースはもとの名をセント・ニコラス。今から千七百年くらい前、小アジアのリシアという国のミラの町に生まれた。たいへん情深い人で、三人の娘をかかえて貧乏な父親が悲しんでいるのを見て、ありったけの財産を窓から投げこんで救ってやったという話が伝えられています。のちには聖者の列に加えられ、子供や船乗りの守り神として広くヨーロッパの国で祭られるようになりました」。また、暉峻淑子は『サンタクロースを探し求めて　グーテンベルクの森』（岩波書店、2003、p.100）で、「聖人ニコラウスは西暦二七一年に古代の小アジア、リキア地方のパタラで裕福な家の一人息子として生まれた」と述べている。さらに、葛野浩昭の『サンタクロースの大旅行』（岩波新書、1998）のサンタ・クロース

Hosei University Repository

に関する記述を概略すれば、次のとおりである。聖ニコラウスがサンタクロースとされる有名な伝説がある。それによれば、一人の貧乏な隣人に三人の娘がいた。彼は、困窮のあまり娘三人に春をひさがせ、その金で暮らそうとした。聖ニコラウスは、この話を聞いて金塊を布につつみ、夜ひそかに貧しい隣人の家に窓から投げ込んだ。隣人は朝になって金塊に気づき、神に感謝し、その金塊で長女の結婚式をあげたというのである。また、窓から金塊を投げ込んだ時に暖炉に干してあった靴下にその金塊が入った。これによって靴下の中にプレゼントを入れる風習ができたという。

（2） 中村政則、天川　晃、尹健次、五十嵐武士編、「占領と改革」『戦後日本・占領と戦後改革　第２巻』岩波書店、1995、p.51。

（3） 前掲書、p.51。

（4） 知切光歳『天狗の研究』原書房、2004。

（5） 『図説アメリカ軍が撮影した占領下の日本』（太平洋戦争研究会＝編、河出書房新社、2006、p.44）の写真には建物玄関上部にMerryXmasの大きなローマ字が飾りつけられ、Xとmの文字の間に☆（星）が配置されている。玄関の柱には多数の☆（星）も確認することができる。また、玄関両脇には人の背丈をはるかに越えるクリスマスツリーが配置されている。そのような写真には次のキャプションがついている。「占領１年目も年の瀬を迎え、GHQの第一生命ビルの玄関もクリスマスの飾りつけが行われた（12月23日）」。

（6） 岩崎　稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一〔編著〕、「戦後日本革命の挫折」『戦後日本スタディーズ①「40・50」年代』紀伊国屋書店、2009、p.118。

（7） 竹前栄治『GHQ』岩波新書、1983、p.192－p.193。

（8） 太平洋戦争研究会編『図説アメリカ軍が撮影した占領下の日本』河出書房新社、2006、p.92。

（9） 前掲書、p.92。

Hosei University Repository

Christmas in Japan occupation years (1945-1952)

Myungjoo Kim

International Japanese Studies Institute Graduate School of Sociology Master's Course 10Q4233

Abstract

In this thesis "The Occupation years (1945-1952)" I compared and analyzed Christmas in Japan and in the USA, paying attention not only to the Christmas influenced by the leading role of the occupying US forces, but also to the way the Japanese, especially Japanese children, spent Christmas under the American occupation. It became thus clear that in the occupied Japan Christmas was celebrated with some political intentions by the occupying side and in the social relations between the occupying and the occupied sides. Through this, it was implied that Christmas had a big religious and cultural significance in Japan at the time.

Obviously Christmas is not the only example of a custom, habit, culture, idea, religion or system from western societies that has established in Japan, it is one among innumerable others. From an international point of view, understanding how Japanese culture is changing in contact with the cultures of other countries and rethinking the position of Japan is an important academic mission to be fulfilled by the International Japanese Studies. This is what this thesis humbly tried to do.